

発行/平成2年2月15日 No.15
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

特 明日の暮らし創造 集

- 八枚の万国旗から
武智 勇三…4
- 田舎のねずみと都会のねずみ
久保田光一…6
- 自然(星)に親しむ暮らし
岩田 恒郎…8
- 『手作り芝居』に生きる
原 正憲…10
- 2020年に向かって
ヘロン久保田雅子…12

REPORT

津島町・グルメの町宣言

- 「^{おいしんぼ}美味進歩」 岩藤 賢治…14
- 地域づくり学んで三年よもやま話 ……16

MESSAGE

あなたのコーナー……………17

元気印REPORT

越智諸島ハッピーサークル……………18

研究会議 News Letter

- 中島みかん・オレンジシンボ……………20
- 研究会議事務局から……………22

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 15



明日の暮らし創造

時代は一九九〇年代に突入し、二十一世紀まであと十年を残すところとなってしまった。これからは、より人間らしい地域生活の創造と自立を目指す地域活動が大切となってくるのではないだろうか。何気ない日々の暮らしや活動の中に、明日を創造していく原動力が秘められているのかもしれない。そんな中から、地域とは何か豊かさとは何かを考えてみたい。それぞれ地道に取り組んでいる方々に執筆・取材をお願いした。

八枚の万国旗から

松山市

武智 勇三さん

(取材／豊田)

● おやっ、万国旗

「万国旗のある郵便局」おそらく日本広しとはいえ、そうあるものではない。とりわけ目につく松山正円寺郵便局の風景である。

多忙にもかかわらず、武智勇三局長にお話を伺うことができた。

「外国に行った時、ホテルに世界の国旗が立ててあったんです。どこの国からでもいらっしゃいという気持ちの表われではないかと感じました。それがヒントにもなつて、局の前に立ててみたんです。



武智 勇三さん

● バンフとの姉妹局提携

昭和六十二年、武智局長自らがカナダのバンフ郵便局を訪問して姉妹局提携をした。バンフは、ロッキー山脈のふもと標高一三〇〇

メートルにある避暑地である。西

海岸のバンクーバーから約六〇〇キロのところにある。日本人は何かと金にからんだことをやることが多いので、最初は不審に思われたようだ。純粹に文化的な面での交流をしたい。一人でも多くの友達を持ち、ほんの数枚の万国旗から小・中学生に夢を与えてあげたいという気持ちに通じたといえる。それは何れも有名になろうとかということではなく、純粹な気持ちそのものであったのだ。そのことで、地域の人や小・中学生が相談にくることもある。文通のことや子供がカナダに行くので、どんなところか教えて欲しいとか・。そういう中から視野は世界的な広がりを見せていくのだろう。

● 忘れられたもの

いま日本は経済的には確かに豊かになったかもしれない。物はあふれ生活は確かに便利になった。でもその一方で、やさしさとかやすらぎとかゆとりとか、「心」が

忘れられている気がする。

「戦後四〇年でこれだけの大国になった努力は認めたいと思うけれども、これからは、もっと精神的な面で豊かにならなければ。忙しすぎて時間にゆとりがなくなつてしまったようだ。生活のテンポを落すことは、遅れることではないのに。二十一世紀を担う子供たちには、もっとゆとりや夢を持っていってほしいですね。」と武智局長はつぶやいた。

「万国旗を飾ったり、局の回りに木を植えて名札をつけたりするのは、興味を持たせてあげることです。後はそれぞれがやってみていくことです。そのきっかけを作ることができればよかったです。それに、世界を知ること、本当は日本や地域を知ることだと思います。自分ができることから始めただけですよ。」

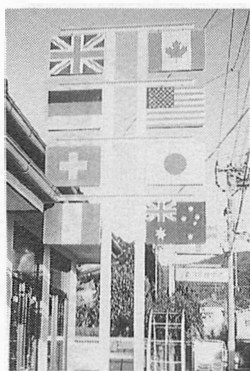
そこには、世界数十か国を見て、改めて地域での地道な取り組みの中や、何げない生活の中に原点があることを思う日本人の姿があった。

郵便局前に飾られた万国旗



★最近、ヨーロッパを訪ねたという武智局長さんから紀行文をいただきましたので紹介します。

国名全部わかりますか？



久万高原にて



昨年十一月にスペイン・オランダ・フランスに旅をした。

バルセロナは、スペインであってスペインではない独自の、カルタニャ文化を誇る地中海の港町である。

石畳の路地、ゴシック地区、青空、そしてガウディ、何よりも私を感じた事は物事のテンポがスローなこと。大学の夏休みは、六、七、八、九の四ヶ月間もある。

二年後にオリンピックがあるというのに、選手村の工事、又、そこから競技場までの地下鉄等、計画はあるが、まだ全然進んでいない。

おまけに昼休みは長く、四時までシエスタというお昼寝の時間がある。

昼休みは自分の家へ帰る人が多く、市内の交通ラッシュは一日四回となる。とにかくゆっくりしたものである。

今の日本では考えられない事だが、学ぶことは多い。

山登りも同じだと思う。頂上にいち早く登る事も大事だが、ゆっくり登り立ち止まって花を見たり、小鳥のさえずりを聞く心のゆとりも大切なことだと思う。芸術というものは、そんなゆったりリズムの中からしか生まれないのではないだろうか。

バルセロナは、有名な建築家のガウディ、画家のピカソ、ミロ、ダリ等のすぐれた芸術家のふる里でもある。

又、作家のヘミングウェイは、スペインに対する愛着が特に強く「日はまた昇る」「誰がために鐘は鳴る」等、スペインを舞台にした数多くの作品を残している。

グレコ、ヴェラスケス、ゴヤの

絵のある立派なプラド美術館もいいが、私は小じんまりとした落ち着いた感じのあるとても美術館らしくないピカソ美術館の方が好きだった。

話は変わるが、今年のクリスマスイブは、久万高原にある私の別荘で近所の子供達二〇名ほどと楽しく過ごした。

気温はマイナス一度だが、ファイアーグランドでは直径三〇〇五センチもある丸太を燃やすので暖かい。その火で七面鳥を焼き、コーヒーを飲み、ケーキを食べること、すべて外でのパーティである。その火を囲みながら、私の旅したカナダやオーストラリア、スイス、イギリスの話など聞かせる、子供達の目は一段と輝く。私のやっていることは小さなことだが、それが何かのきっかけとなり、だんだんと輪が広がって、心にゆとりのある人間が一人でも多くなればと思う今日この頃である。

田舎のねずみと都会のねずみ

松野町

久保田 光 一

青年海外協力隊員として、昭和六十年七月から六十三年七月までネパールで暮らしていました。日本に帰国して一年半過ぎてしまっ

たわけです。今ではもうすっかり日本人らしくなりました。ネパールと言えば岩村先生の『古切手』『医療協力』を、思い浮かべられる人もいらっしゃるのではないのでしょうか？実は私も小学生の頃『古切手』を集めたものでした。

「青年海外協力隊に参加した理由は？」とよく聞かれますが、一つは「自分の目で実際に外国を見たかった。」もう一つは「自分の田舎に帰りたいなかったこと」が大きな理由でしょうか？ネパールでは自分の田舎よりずっと不便な田舎に住



農業普及に行った農家の家族と仕事仲間。(右から2番目が久保田さん)

トウモロコシは、炒って食べるデントコーンです。

み、そんな私が三年間過ぎて帰るところになると、逆に田舎型の人間に変身して帰って来たいです。日本には昔からの「しきたり・

習慣・礼儀作法」がすっかり残っていたように思います。今ではそういうものがドンドン消え、忘れ去られようとしているのではな

いでしょうか？私はネパールの農業普及のため山の集落へ行きました。行くと泊めてもらう農家でお茶を出してもらいます。十歳過ぎの娘が「お茶です。」と言って、左手を右手のひじに添えてウヤウヤシク渡してくれるのです。ある農家ではハチミツの巣にミツが詰まったままを出してくれました。年に一度しか取れないぜいたく品を。ある農家では一年分の米が不足するにもかかわらず、「ご飯を食べるに帰れ！食べる食べる！」とすすめられ食べました。自分の親が亡くなると男子は丸坊主になります。そして一年間全身白の衣服をまとい、白い帽子をかぶり肉・卵・牛乳を断つそうです。もちろん酒も。みんなそういった習慣・風習・しきたりが自然です。

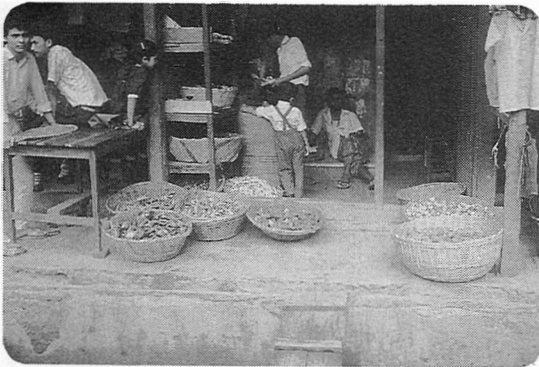
私たち日本人はそういった日本の習慣・風習・しきたりを受け継がないで育つ傾向があり、わからない大人が増えてるように思います。私自身その代表選手ではないかと思っています。社会の流れが利潤追求に走り、流れに沿わなかつた習慣・風習・しきたりは忘れられたのでしょうか？外国人が日本の習慣・風習・しきたりを調べにやって来ても、本物には触れられない時代になりつつあるのではないかと思っています。『国際化・国際化』と呼ばれ、誰しもが国外に目を向けるようです。『国際化』は、日本の習慣・風習・しきたり・伝統文化を、外国でも「どう」と「言える人。外国の文化・習慣・風習を知り、認め合い、その違いをわかち合うことなのではなからうかと思っています。『違って当然！』と思う気持ちを持って、外国人と大いに語って欲しいと思います。ネパールで大きい水力発電所を日本と中国の援助で建設しています。それができれば全国の電気がまかなえると言われています。あるネパール人はお金になるので、働きに行きました。一日十時間以上も働かないといけなかったようです。「お金は高いけど仕事はつらい、自由な時間がなく家族との時間がもてない。」と言って、仕事をやめたそうです。その話を聞

いた時笑いました。「アーン、ネパール人だなあ。」典型的なネパール人です。「田舎のねずみと都会のねずみ」を思い出しました。ネパール人は田舎のねずみだったんだ。日本人は都会のねずみなのかな。

どっちが幸せなのか？私には判断が付きません。以前の私は、都会のねずみになろうとしていたようです。今は田舎のねずみの生き方に憧れています。

ネパールと言われれば、ヒマラヤ・エベレストを思い出される人が多いと思います。私は「ビースターライ・ビースターライ（ゆっくり・ゆっくり）の国だったと回想します。国の流れはもろんのこと。人・仕事・農業もそうでした。日本人の作る畑は隅から隅まで雑草がなく、手入れが行き届きこれ以上何もすることがない程です。肥料をやって間引きをして、虫がつけば消毒して病気がであれば消毒します。今日日本では「無農薬・有機農業」と盛んに言われています。ネパールのちよつとした

山の中では、昔から無農薬で今日まで続いています。『ピュア自然』だって近所に農薬を売っている店がないんですから。インドなど外国から農薬が入っています。都市近郊では大分農薬が入っています。田舎産の野菜は見てくれはよくありません。殆んど小粒の物ばかりです。品種改良もされてないような、肥料もろくに効いてないような物ばかりです。そんな野菜作物なのに病害虫に強く、やせ土でも育ったりします。昔からある皮が赤いジャガイモと、ミニトマトより小さいトマト。新しく改良されたジャガイモ・トマトは虫がつきやすく、農薬が必要となります。そして美味しくないのです。小さくて見ばえはしないけど、美味しい自然食。形にこだわらないで味を追求した自然人たち。私たち日本人もそろそろ自然の味覚を楽しむ、田舎のねずみになってみてはいかがでしょうか？



← ネパール 田舎産の野菜
赤いジャガイモ

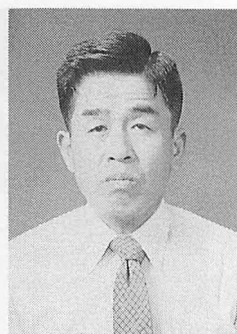
山の段々畑での田植え
田舎の風景は平野が殆んどない。 →



自然(星)に親しむ暮らし

伊予市

岩田 恒郎



岩田 恒郎さん

☆星との巡り会い

私が星に興味を持ち始めたのは七歳のころでした。その当時は第二次大戦の終戦直後で物は不足していました。野山の自然や星空の美しさにあふれていました。十二月月上旬の夕方の東の山の上にきれいに縦に並んだ三つ星が出ていましたので、当時小学校の教師をしていた父に尋ねたところ、「オリオン座の三つ星」だと、教えられました。古い星座早見盤をたよりにして一時間ほど後で見ると大きい四角形の中に斜めに三つ星が入っているオリオン座だとわかりました。澄み切った冬空に明るい七個の星で出来ているオリオン座が印象的でした。あのころには星に関する入門書はほとんどなく、ましてや小学低学年の児童向けの本は皆無でした。たまたま家にあつ

た「星座神話」や「星座の親しみ」などを眺めていたのを思い出します。本がなかったのがかえって幸いだったのかも知れません。理論よりも実践で晴れた夜には星座早見盤を片手に星を眺めていました。

☆望遠鏡づくり

数年後には天体望遠鏡が欲しくなりましたが、とても高価で買えませんでしたが、そこで、父が以前に購入していた天体望遠鏡のレンズセットを使って小さい望遠鏡を作りました。土星の輪がはっきりと見えないので子供なりにいろいろといじくってみましたが、効果はなかったように記憶しています。後になって分かったのですが、口径が二十八ミリのシングルレンズでは月のクレイターと木星の濃く太い縞模様しか見えず、土星の輪

は無理だったのです。その後には口径が七十五ミリのレンズセットを入手して百倍の望遠鏡を作りました。シングルレンズなので口径を少し絞りましたが土星の輪はよく見えませんでした。

☆彗星の出現と天体ブーム

数年前にハレー彗星の出現が話題になりました。前回の明治四十三年(一九一〇)に大彗星に見えたので世間の関心が非常に高くなりハレーブームを引き起こしたようです。しかし、明るさが二等くらいで肉眼で見えた尾の長さが一〇度ほどで期待はずれでした。

初めて彗星を見たのは昭和二十三年の秋でした。松山市の中心部にある叔母の家の二階から明け方の東の空に長い尾を引いた彗星を見ました。当時は高い建物がなく

光害もなかったので淡い光の彗星がよく見ええました。昭和三十二年には春と夏に明るく長い尾を引いた大彗星が出現して夕方の西の空に見えました。これから後にもハレー彗星以前に数個の大彗星が出現し、夕方の西の空や明け方の東の空に見えました。

☆天体写真の撮影

昭和三十六年四月から愛媛県立高等学校の理科・数学の教師になりました。昭和三十八年四月から高等学校の普通科で地学が必修になりました。高校生に天文を教えるようになりました。ところが、教科書に載っている天体写真はいずれも大きい天文台の大望遠鏡で撮影したものばかりでしたので、身近な教材として簡単な天体写真の撮影を始めました。あのころには天体写真の入門書は皆無に等しく、ただ一つ刊行されていた天文雑誌と一般の写真入門書を頼りに手探りで撮影・現像処理をしていました。今で言う固定法ですが、普通のフィルムとF三・五で五〇ミリのレン

ズで昭和三十七年の春に現れた関・ラインズ彗星や星座の撮影ができました。昭和三十八年ころから天体のカラー写真の撮影を始め、当時発売された高感度のリバーサル（スライド用）フィルムを用いて撮影しました。特に昭和四〇年の秋に現れた池谷・関彗星は見事に写りました。このころから天体写真にも市民権が与えられ、新しい天文雑誌が発刊されて天体写真に関する記事が増え始めたようです。三十五ミリカメラのレンズでは焦点距離が短いので月面の大きいクレーターと太陽面の大黒点しか写せません。木星の縞模様や土星の輪を撮影するにはどうしても天体望遠鏡が必要です。昭和四〇年度に理科教育センターに勤務していきましたので、屋上に設置されていた一五〇ミリの屈折望遠鏡を用いて西岡千頭先生の御指導を得て惑星面や月面の撮影をしました。

☆天体観測施設の設置

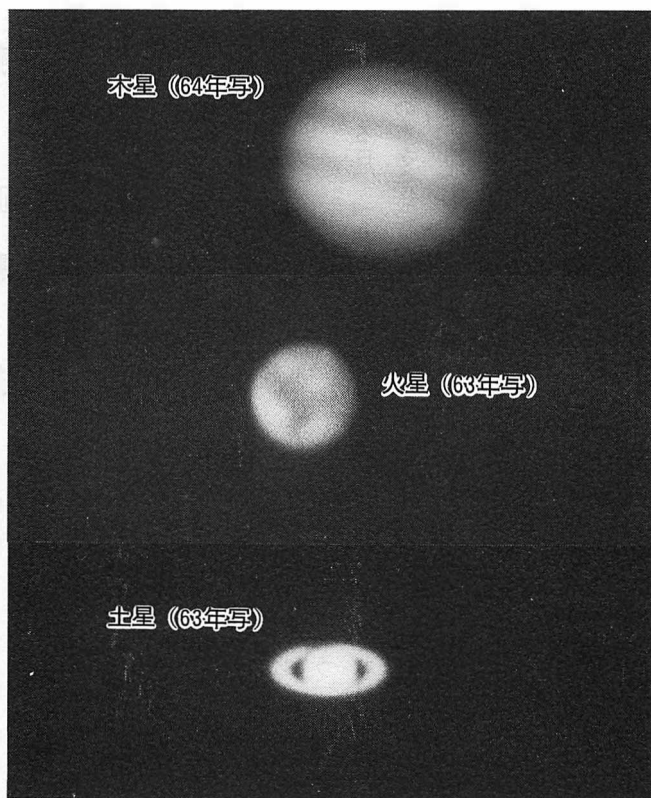
昭和四十八年に自宅の古い納屋を改築する機会に、屋上に二五〇

ミリの反射望遠鏡を備えた天体観測施設を設置しました。望遠鏡を用いて地域の愛護班に惑星を見てもらったり、いろいろな天体写真を撮影しました。その後、昭和六十二年に鏡筒を二五〇ミリから大

きい四一〇ミリに交換して昭和六十三年に大接近した火星を撮影しました。

☆愛媛星の会での活動

昭和五十五年ごろから愛媛星の



会の活動に加わり、主に普及活動に携わるようになりました。天文学は、どちらかと言えば一般的ではありませんが、昨年の十二月二日の夕方に起こった金星食が人々の

関心をひいたように星空や天体現象に興味を失つ人は少なくないようです。特に幼児や小学生には星ばかりではなく昆虫とか植物などの自然物にかなり深い興味をもつ

ている人が多いようです。

愛媛星の会は毎月一回どこかで星空を観察する例会を開催していましたが、きまった観測会場がないので毎月場所が変わるジプシーに専用の観測所を建設する動きが興まり、大口径に代えて不要になった二五〇ミリの鏡筒を提供し、知人から古い赤道儀の架台を譲り受けて松山市の東部に観測所を建設しました。土地を地元の有志から安く借り、建物を会員の奉仕活動で建てました。この観測所は地元の子供たちに星空の美しさを味わってもらうとともに会員の観測に利用していく予定です。

星空の美しさはその土地の自然の美しさの一つです。美しい草木が育たない所では美しい星空は見えないようです。最近、夜空が明るくなつて星空の美しさが失われつつありますが、同時に野山の生物の活動が変わり始め、季節外れの開花・結実などが増えているようです。美しい星空を保つことはより良い自然環境を保つことにつながるのではないのでしょうか。

『手作り紙芝居』に生きる

菊間町中央公民館

原 正憲



原 正憲さん

話や伝説を、年下の者に語り継いでいくことができないということを目指しています。

そこで私は、何とかして民話や伝説を後世に伝えていく方法はないものかと、毎日考えるようになりました。

そんなある日、『さくまの民話と伝説』の本を完成させた公民館調査企画部のかたに、「原君、君は絵心があるのだから、民話と伝説を紙芝居にして広めてくれないか。」という話をされました。

私は、渡りに船と紙芝居作りに本格的に取り組んでみることにしました。

それは、仕事から青少年の健全育成にもつながるものがありました。

このことは、裏を返すと、今の若者というのは、昔から伝わる民

○苦勞話

でも、文章を見てイメージを描き紙芝居にしていこうという試みは何しろ初めてのことであったので、当初は戸惑うことが多かったように思います。

例えば、①菊間に伝わる民話と伝説を私自身の主観で捕えて絵にするため、語りべの意図が充分に伝わらないのではないかと不安があった。

②本の中のお話は、必ずといっていいぐらい「昔はのう」という言葉ではじまっているわけですが、絵にする場合、一体いつの時代なのか分らないため、登場人物の衣装や風景を自分流にまとめるのに苦勞した。

③どの場面までを一枚の画用紙におさめたらよいのか分からない、ということがあったからです。

こうして、手探りの状態で何作かができ上がっていったわけですが、軌道に乗ってからも、苦勞というか困惑することがありました。

それは、①子どもというのは、主人公を物語のはじめから終りま

で同じ衣装で通して描かないと分からない。

①一作を画用紙約二〇枚平均でまとめないと、子どもは、分りにくかったりだれたりする。（読みかたにもよるが）

③紙芝居を描くことに力を注ぐため、ついつい話しかたがおろそかになり、棒読みになってしまふ。（現在は、抑揚をつけて読むようにしている。）

④絵を描くもの、寝てしまふとイメージが壊れるので、徹夜で仕上げるため風邪をひくことがある。

⑤菊間の各地に民話や伝説が残っているが、絵になりやすいものとなりにくいものがある。といったことにもぶつかったからです。



菊間小学校PTAで



東雲分館子ども会で

○公演中の様子

かくして、苦勞を重ねてきた紙芝居作りですが、今では十七作もの作品ができ上がりました。

それではここで、公演中のお話を少しさせていただきます。

公演は、子どもたちの休み間に行うことが多いわけですが、特に忙しいのが夏休み中です。

平成元年も、自転車に紙芝居用の木枠をくりつけ、あめも子ども

もの数ほどを袋に入れて、町内八ヶ所の分館や小学校のグラウンド

を回ったのですが、地域的に離れたところを回るので、なかなか大変でした。

なかでも、歌仙小学校のグラウンドで行った紙芝居は、大変でし

た。

と申しますのは、夏の夜だけに蚊が多く、足にとまった蚊をたたきながら左手にハンドハイクをじっと押さえたまま持ち、右手で画用紙を抜かなければならなかったからです。

でも、小規模校で育つ子どもたちだけに感性が豊かなので、私自身、充実感に浸ることができました。

このように、紙芝居には子どもたちの感性を確かめることができ、要素があるように思うのですが、テレビや雑誌で怖い場面を見慣れている子が多い今、紙芝居で少々怖い作品を紹介しても驚かない子が多いのには驚かされます。

菊間は、幸い自然に恵まれているので、子どもたちには草花を見てきれいと思う気持ちを持つてもらったり、海からは色々な魚がとれるのだから、実際に手に触って、すごいという感性を育ててもらいたい気がします。

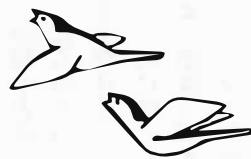
以上が公演をしている時の様子や感想です。

○地域を生かす

紙芝居というのは、映画と違って一方通行でなく、子どもたちと対話をしながら行えるので、実演する側も、楽しくやらせてもらっています。

私自身、これからも各地に残る民話や伝説を根気よく作り上げ、できるだけ多く残していこうと考えています。

そして、子どもたちには、一人でも多くの子が町内に伝わる民話や伝説に触れることによって、郷土の良さを認識してくれることを期待するとともに、彼らの家庭では、三世代共通の話題に民話や伝説を取り上げてくれることも願うのであります。



2020年に向かつて

松山市

ヘロン 久保田雅子

もう十年も前のこと、アメリカ

のバージニア州に住んでいた頃のことです。大学の特別講座・ESL（外国人に英語を教えるためのクラス）で、ベティという女性に会いました。白髪を短くまとめきびきびと自己主張する彼女は六十五歳。その年に国務省を引退したのです。

「自分の好きなことを自由にできるこの日は待ち望んでいたよ。定年後は『余生』なんてもう古いわ。余りものの人生などとは考えたくないの。だって、会社はやめても、仕事をやめたわけじゃ



ヘロン久保田雅子さん

ないのですものね。」

ESLの講師としてのライセンスを取得したベティは、その後、成人学校でベトナム難民・南アメリカからの避難民たちに、英語を教えています。

「これまでに蓄積した能力が役立っているのを実感するのは、とても嬉しいことよ。生涯の内一番、実りの多い時をこの歳になって経験できるなんて……」と、七十六歳になったベティは言います。

■AARPとは

滞米十八年を通じて、私はベティのように第二のステージに向かつて、エネルギーに生きている高齢者に数多く出会いました。

そして、その人達から、全米退職者協会（AARP）の存在を知りました。AARPは世界最大の

中高年団体で、三、五〇〇万人の会員をかかえています。これはアメリカの五〇歳以上の人口の四〇%を占めているのです。

AARPは、アメリカでの定年制を廃止させるのに重要な力を発揮しただけでなく、現在は「ロングターム・ケア」ということで、老後のケアや年金改善の運動もこなっています。

AARPの基本理念は「奉仕されるのではなく、奉仕する」(To serve not to be served)ことです。創始者、アンドリュース博士が選んだこの言葉は、個々の自立したメンバーが集まり、他人のために何ができるかと考え、実践しようと呼びかけ、他人に対する奉仕が自分の生きがいであり、喜びであることを強調しています。

「長寿社会」とは、人間が長生きすることを素直に喜べる社会だと言います。「してもらう」という意識から、ベティのように、自立した活力ある人達が、自分自身を成長させながら「社会のために何かしてあげたい」と新しい生き

がいを見つける社会でもあるのです。

■シニア・ネットワークの形成

いま日本では、特に愛媛県では高齢化が急速に進んでいます。それに対応して政府も二十一世紀の本格的な高齢化社会に備えるために、「老人基本法」制定の検討を始め、①雇用や年金制度による所得保障、②保健・医療・福祉サービスの充実、③持ち家対策や交通施設の整備などを明記しています。

ただし現実には、引退後の公的社会参加には、シルバー人材センターと老人クラブくらいしかありません。「寝たきり」「ボケ」問題は大きく取り上げられても、ケアを必要としない九割のエネルギーある人々が、活用される「場」はないのです。彼らの活力、知的能力を活かせる「受け皿」をシステム化していくためには、どうしても行政・企業・団体・個人が横につながったネットワークが必要になってきます。お互いにライバル意識を持つのではなく、「長寿社

■あなたの2020年

ご存知のように、いまから30年後、2020年には65歳以上の人口が25%、四人に一人が高齢者ということになります。ですからこの会では、2020年に向かって、現在の高齢化と共に、未来の高齢者も共に考えようと、年令に制限がなく、若い人達も大歓迎です。

高齡化問題は女性の問題でもあるところから、より多くの女性達に自分自身の事として考えて欲しいと思います、女性達を中心にしたパーティーなども企画しています。昨年の秋は、新米を使った立食パーティーをし、会食の後は、輪になっ



新米を使った立食パーティー
「NICE RICE NICE」

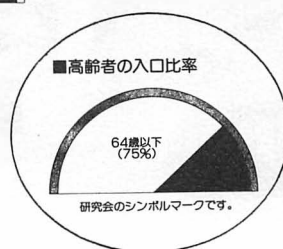
て座り、家庭・企業・社会における女性の地位、待遇などをディスカッションしました。

会の内容は、四本の活動の柱、

①経済・資金、②健康、③文化、④福祉、の分野で担当を決め、活動の組み立てを進めています。

具体的には、▽高齢者というこ
とでレベルを落さない「シニアアカバ
レッジ」の推進▽保険・年金・定
年後の経済プラン・生活設計など
について、県内各地を回って、討
論や情報提供を行うキャラバン隊
の実施▽講演会・旅行会・スポー
ツなどのイベントの主催▽シルバ
ー情報を提供するニュースレターの

あなたの
“2020年”は？



発行など、夢は広がります。

■コミュニティの中の“個”

2020年に向かって大きく変わろうとしている社会システムの中では、今まで以上に個人の自由な意志を尊重することが大切になって来ます。利己的なほど、自分自身の幸せを求める「個」があつてはじめて、一人ひとりの主体性、創造力が生まれてくるのです。ARPPのモットーとする「他人のために「私」は何ができるか」と考える、ボランティア精神も、これから新しく創られていく、コミュニティへの参加意識も、「個」の確立なしには実現できないのではないのでしょうか。

は、このような会です。

「長寿社会を考える研究会」の目的はひとつです。
2020年の未来に向かって、より良い長寿社会づくりを推進する会です。これから、いろいろな活動を通じて、交流の輪を広げて行きたいと思います。ぜひ、ご入会下さい。

資格 年齢に関係なく、どなたでも入会できます。
若い人達、大歓迎です。

個人年会費 3,000円

■お問い合わせ、お申し込みは
長寿社会を考える研究会
〒790 松山市小坂4丁目9-10
(ドルチェ館305)
TEL0899-31-0099

シーア・カレッツジ

▶地元の大学などと提携して、趣味的な講座でなく、生涯教育として、グレードの高い実学講座を開きます。

シア情報キャラバン隊

▶高齢者にとって、いま必要な情報
年金、財テク、仕事、求人、レジャ
などの情報を県内各地を回つ
ての人々に提供します。

文化、スポーツのイベント

▶講演会、シンポジウム、音楽
陶芸、絵画、文学(創作)、
...など、全方面にわたります。

国内外のツアー

▶ 高齢者向けの、知的な内容を盛り込んだ本を企画します。

在宅ケアーシス

▶高齢者にとって
従事者の養成と

ニユースレタ

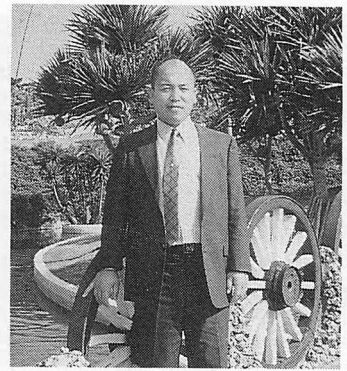
▶研究会が集
レターでま

津島町・グルメの町宣言

「あ い し ん ぼ 美味進歩」

津島町産業経済課

岩 藤 賢 治



「それは、山々の屏風で大切そうに囲われた陽に輝く盆地であった。」で始まる小説「てんやわんや」師子文六先生ゆかりの里、我が津島町は、南楽園の開園と同時に観光協会が出来、また今年度より会員の責任で企画・立案をして、もう少し力強くするため、各団体より推薦された人達による観光推進部会が出来ました。

現在観光パンフレットの製作中で、郷土料理の写真撮影の打合せ時に、てんやわんや王国から三・四年前より、色々な施設を造った



りするには、時間と金がかかるので、津島の、郷土料理を県内外に広くPRをして、観光振興に努めてはと話していた。今回その様な場を設けて、その時にパンフレットの写真を撮れば、すばらしい物が出来るのではと話が進み、十二月六日に、グルメの町宣言「美味進歩」を開催することになりました。主催・観光協会、企画・てんやわんや王国、東京の地場産業研究所（王国の文化大使 莫根達弘所長）で、早速合同会議を開いて、準備にかかりました。舞台の看板



は手作りすることになり、観光推進部会副部長であり、王国の企画庁長官である今村さんを中心に四人が夜集って縦三メートル、横四メートルの看板を作製しました。メニュー板や杉丸太のメニュー台は王国の人達に依頼して、りっぱな物が、出来上りました。十二月三日の日曜日より、西料飲組合長他四名で、山へ竹やつわなを取りに行き、前日は午前九時より、三十名の人達で会場準備をしました。松の木、シダ、ススキを取りに行く者、小船、水槽を借りに行く者、



会場の飾り付けをする者等、それぞれに別れた。夜遅くまでかかるのではないかと、心配していたが皆んなの協力により、四時過ぎには、準備が終わりほっとしました。

いよいよ当日を迎え、八時半より、料飲組合の人達が作った。心のこもった郷土料理が、続々と、運びこまれ、観光パンフレット用の写真撮影に入りました。十一時、になり松岡

多四郎観光
協会長から

「津島の海

の幸、山の

幸を生かし

た津島なら

でわの料理

を十分味わ

っていただ

きたい。」と

あいさつが

あり、料飲

組合長が

「伝統の郷

土料理を見

直し、物真



似ではない津島の味の料理を食べてもらって、食文化の向上と郷土料理による観光振興に寄与いたしたい。」とグルメの町宣言を行った。来賓の中には、てんやわんや王国と一ヶ月前に、人・物の交流を図り、むらおこしに役立てるため、姉妹提携を結んだ沖縄県の一沖会のメンバーや、沖縄市観光協会長が、紹介され、その場を借りて、

てんやわん

や王国の任

命式が行わ

れた。沖縄

県商工会連

合会の野中

正信氏が、

松岡国王よ

り、沖縄開

発庁長官に

任命され、

てんやわん

や王国と一

沖会のパイ

プ役になる

ことを約束

されました。



心からのもてなしをしていれば、少しずつ、変わって行くことに期待したいものです。さあ、次は、つしま産業まつり（しらうお祭りもドッキング）だ、今回の経験を生かしてスタッフの皆さんと力を合わせて、頑張りますので、全国の皆さん、是非、一度は津島町へおいで下さい。

今回の案内先は、観光業者、交通機関、放送局、新聞社、情報誌、近隣の市町村長及び議長等であり、津島料理を食べさせていただいて、直接料飲業者との話し合いの場や、アンケートに記入してもらい、率直に感じたことなど、御意見をいただきます。グルメの町宣言をした以上、恥かしくない対応をしなくてはならないと思います。今からは、焦らずに、町民全員が、

「原点は各自が好きな解釈で…」

別に、こうでなければイケナイという定義もなく、各自が好きな解釈して喋ったり実行したり出来るのが、まちづくりとか、むらおこしとかと呼ばれ…、いま各地で多彩に繰り広げられている地域づくり活動のようです。

私は、この「各自が好きな解釈で…」にこそ、人びとが『自由』に暮らす…という地域づくりの原点があると信じていまして、ここからスタートしないで、みんなが仲良く総ぐるみで…とか、良いことだからヤルべきだ…とかに始まる動員型の地域活動は町づくりとか村おこしとかと唱えていても、本物ではないんだ…と、好きな解釈をしています。

もっともこの自由は、福沢諭吉先生の言葉を借りれば、『天の道理に基づき人の情に従い、他人の妨げをなさずして我が一身の自由を達することなり。自由と我儘との界は、他人の妨げをなすとなさざるとの間にあり。(学問のすすめ／初編)』と言うことになります…、私流ではこうした自由を踏まえ、『自分のことは自分でする…』のが、地域づくり活動のベースだと思っていますのです。

「1町の面白い人たちのしかけ…」

ところで、そのことに気づいたのは三年前

です。たまたま訪ねた1町で地域の面白い人たちに出会い、いきなり「農らの町づくりの手始めは、生活保護を貰おう運動だった」と言われ、「エッ！」と驚いたことからです。

話を聞きますと、「百姓はつまらん」とか、「商売はもうアカン」とかと元気をなくしている地域の人たちに、「何で百姓がつまらんのか」「どうして商売がアカンのか」と問かけると、殆どの人が「百姓では喰えん」とか、「商売では生きてイケン」とかの話になってしまったそうです。

地域づくりの学問三年おもやま話ノート

第一話／少々頭が痛くなる話

愛媛県まちづくり総合センター 宮本俊一

そこで、「喰うだけなら生活保護を貰っては」と奨めると、「それではどうも」ということになり、そんな話の中から「百姓とは何だ」「商売とは」とともに考え、それぞれの仕事に精を出す人も現れて、やがて、その人たちの中から本物の町づくり活動が出来る仲間が出てきたと言います。

勿論、社会的弱者の人が、生活保護を貰うのがイケナイという話ではありません。普通の健常者の人が、自分は何のために仕事をしているのか…、それさえも考えないで、自分

で自分の仕事や「生きざま」を賤しむようでは、何をしてても元氣が出るハズがない…と言うのが本音のようでした。

「自主自立の氣力おこしが…」

言うまでもなく、それをまともに考えるなら、当然、自分の「生きざま」を問い直す自己発見につながり、引いてはその自己を実現する元氣…。「自分のことは自分でする」自主自立の氣力おこしの筋書きとなります。

また、その要点を福沢先生の言葉で述べると、『国中の人民（地域の人びと）に独立（自立）の氣力なきときは、一国独立（地域自立）の權義（註）を伸ぶる能わず。（学問のすすめ／三編）』とされた上、その次第として三条を挙げ

解説されていますが、その第一条で「独立（自立）の氣力なき者は、国（地域）を思うこと深切ならず。」とされて、『独立（自立）とは、自分にて自分の身を支配し、他に依りすぎる心なきを言う』とあります。当たり前と言えは当たり前ながら、当節の地域づくり活動では考えたい言葉です。

「註」 権理通義の略で英語の「ライト」という字に当る。権理通義とは、人々その命を重んじ、その身代所持の物を守り、その面目名誉を大切にすることの大義なり。

あなたのコーナー

「口だけ男の独り言」

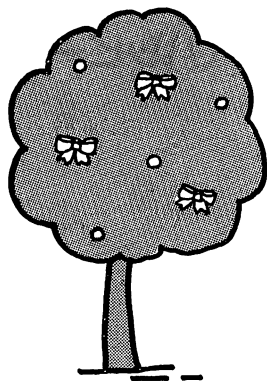
大洲市
亀田 稔

リゾート開発、むらおこし等々多くの市町村が一生懸命取り組んでいる。しかし、何か規格品の取り組みをしている所が多いような気がしてなりません。(担当の方すみません。) 何かが足りない! 自然との共存? いや、受け入れ側の

取り組みが大切ではないのでしょうか? リゾート地は、休養をする所なのだから、自然の中での人とのふれあ

いがある、ゆつくりと休養を取って行く、観音街でない行楽地、本来の意味でのイベントの組める町、家族一緒に楽しめる所、そんなリゾート地がほしい。

今、愛媛には、沢山の優れたリゾーダーがいっぱいいます。そのリゾーダー達が優れているがゆえにどん



どん先行しています。その人達をホローする人が少ないので住民の人達との較差ができている様な気がしてなりません。サブリーダーを早く養成しなくては!

又、個性のある町づくりを、住民の人達と一緒に楽しく進めてほしい。皆の誠意をもった、接しかたが、遊び等に来た人達とのコミュニケーションを生んで行く。家庭の中で又社会の中の思いや

りが、輪を広げていき、自然の中での休養になり、その中で明日の英気を養う、そんな町だったら、人が集まり、

本当のリゾート地になるのでは! 人づくり↓町づくり↓(地域づくり↓家庭づくり) そんな町、それが、村おこしに発展して行くようになると思っています。思いやりのある人づくりを! これからの、「舞たうん」の活躍をお祈りします。

“心機一転”

楽しき人生

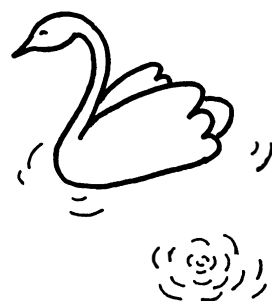
生名村
桧垣 幸子

歴史に残る激動の平成元年は、私にとっても記念すべき年でした。人生の折り返し点に来て、専業主婦から働く女性へと変身し、家庭から職場社会への再進出でした。ボランティアの一員として地域社会に係っていたのが、一転して行政の側から地域社会に係る事になったのです。

住んでいる村が好きだから、一本でも多くの花で村を飾りたく、人が好きだから、人との出会いを求めている。いろいろなボランティア活動に参加して来ました。

又、「ローソク塾」のローソクの炎に心の暖る思いを感じながら、暗やみのローソクの炎の下で、数人の仲間達と時間の過るのも忘れ、人生を、故郷を、二十一世紀を語り合ってきました。

しかし、ここに来て、夢とロマンを追う、ユーモアとペーソスの



巧みな絡み合いに人生の面白さを感じながら、自由奔放に生きて来た私も、自分の置かれた立場の変化に伴い、梓の中で物の見方、感じ方、考え方でしか出来なくなっている自分自身に戸惑いを感じているのです。

この様な近ごろの私に、隔月に送られて来る「舞・たうん」は囁くのです。

「気負わず、気楽に考えていこう! 楽しくやる事が一番だよ。これが全てにつながるんだ。地域おこしにも……。」

今年も、沢山の人達との素敵な出会いを通じて、楽しい事を一杯作っていくと思っています。

元気印レポート

ハッピーサークル 越智アイランド

(ハッピーなふれあいを通して)

上浦町 越 智 研



「楽しい」ってどういうことでしょう。人それぞれ人生があるように思いもさまざまでしょう。例えば彼女と一緒に居る時でしょうか？。それも幸福で楽しい中の一つでしょう。

これは僕の個人的な考えですが自分が色々な面で人間的に輝き、それを感じてまわりも輝く、そしてその輝きが自分にかえて来た時本当の幸福。やってて楽しかったと感じる事だと思うのです。

僕達の仲間は特別生え抜きがいる訳ではありませんが、何かやってみたい、輝ける人になりたい、そんな思いを持つ越智郡内の島に住む数人の若者でした。

同じ島ということで県主催の離島の会で年に一、二度顔を合わせます。せっかくだから何かもって別の僕達なりの交流と研修を通して自分達が輝こう。それが延いては地域の為にさまざまな問題を解決してくれる。そう思ったからです。そしてまず始めに、僕達の思いを受け入れてくれ共に歩んでくれる。その師を求めました。



仲間の脳裏を巡るブレインの数々。

その人を決めるのに時間はかかりませんでした。以前から交流のあるあの広島県北地方から全国に向けてカルチャーショックと言うか奇抜な発想でゆさぶり続けている「過疎逆」の切っても切れないその名も「宮崎文隆」さん。広島県北レクリエーション協会の事務局長で上級指導者なんです。この人はすごいですよ。一例は、二十年近く勤めた会社を辞め、まあ言うところの脱サラで事務局長に専念、全国の仲間にも夢の火種を送り続け

ているんです。

以前にこんな質問をしたことがあります。「なぜ会社を辞め事務局長に専念しているんですか？。なぜそれが出来るんですか？」

「今まで大変だったと思いますが両立させていたのに、それに家族もいらっしやるのに食べて行けるんですか？」と。

僕も理想、夢の一つとして夢を売って食べて行けたらなーという考えはあります。しかしそれを現実のものとしている宮崎さん。その答はこうでした。「人ですよ。食べて行けるだけの人を知っています。」それはまさにブレインのいかに多いかを物語っています。僕達にはまさにこの人しかいなかったのです。そして心良く引受けて下さいました。

現在の僕達の活動は第一段階の取り組みとして、自分達一人一人自ら十分な自己表現が出来るようになること。それはこれから将来地域に色々な面で拘わる機会も多くなるだろうし、時にはリーダーになることもあるだろう。その対



象も大人から子供まで色々な世代の人達だと考えられる。その集まった人達の雰囲気がいかに持つて行くか。その手段の一つとして簡単なレクリエーションが浮上して来ました。このレクも侮ってはいけません。前に進むにつれてさらに奥が広がり、勉強すればするほどそれに情熱を傾けないと答は返ってこないのです。何はともあれ昭和六十三年の十月に第一回目のレクの集いを開催しました。参加者は僕達のブレーンを通じ口コミで集めました。初めの予定では少なくて三十人、多くて五十人ぐらいを集めようと思ったのですが、期日が近づくにつれ僕達の顔は黄色から青色に変わって行ったのです。最終的には延十六人、二日間を通

して参加したのは七人、ほとんどが仕掛人のスタッフでした。宮崎さんには申し訳けなかったのですが少人数ながら僕達なりに盛り上がりしました。特に宮崎さんからマントーマンで話をする事が出来僕達の未熟な考えをぶつけました。この時の参加者は、初めと終りでは一回わり以上大きくなっている



ように感じました。さらにこの時スタッフ同志の絆も以前にもまして強く固まると共に次回の開催にメラメラと炎を燃やしたのです。そしてその第二回目は遂に昨年七月にやって来ました。せっかく

やるんだったら夏のいい時間にキャンプを通して体験しようじゃないか。水泳も出来るしと言うことで大三島上浦町の多々羅キャンプ場をメイン会場に設定しました。当



日は和気あいあいと過すことが出来ました。今回は一昨年の第一回目を十分に反省して打合せからもろの準備まで念入りに詰めて行きました。スタッフも近隣の島に別れており、打合せにははるばる二時間余り掛けて来る仲間もいました。おまけに努力のかいあって女性のスタッフも加わり雰囲気

もバッチリ。この時です。つくづく女性の偉大さとありがた味を感じました。参加者も延四十人余りで郡内はもとより今治・松山、遠くは宇和島からも参加してくれました。学生もいました。お医者さんもしました。今治から島依いに自転車であつてくれた仲間もいました。

人それぞれ人生を持っています。そして輝く火種を持つているはず。僕達はこの火種を消すことなくもともと輝き続けるように、スタッフはもとより心強い助っ人の宮崎さんと一緒に、さらに口コミで参加してくれたすべての仲間と共に歩み続けます。

今年も予定として七月に会を持つ計画を立てています。共に輝き今以上に良い地域づくりと二十一世紀に向けて進みたい方、僕達に信号を送って下さい。

尚、本文ではこの会の内容が十分に紹介出来ておりませんが、もしよければ今年の会にご参加下さい。自分で体験し感じて下さい。

中島みかん・オレンジシンポ

——三三国際会議——

中島町産業振興課

古野 セキエ

中島町は全国でも珍しく六つの有人島と二十二の無人島で構成され「みかん」と「魚」で生計を営む九千人が定住する瀬戸内海の町である。周囲を海に囲まれた島の住民は何時の時代も船を足とする宿命を背負って来た。

今、四国が島でなくなった。そして離島にも橋がかかり海の交通機関は大きく姿を変えた。

我が中島町も高速艇が走り、一時間程の所用時間で松山市駅に到着出来るようになった。念願の通勤・通学が可能になった訳である。昭和六十一年に始まったトライアスロン大会は、ボランティアの住民総参加によるイベントとして定着し島おこしにも一役買っている。又、昨年はNHKと共催による「中島ばんざいまつり」が六つの島を舞台にして行われた。



古野 セキエ さん

その内容は全国に向けて放映されたが、ふるさとを離れた人達からさまざまな思いの手紙が届き反響を呼んだ年となった。

その中島本島で昨年の六月「中島みかん・オレンジシンポ」が開かれた。このきっかけを作ったのは当町で英会話を教えていた米国のスタンフォード大学三年のパトリックモア（二十二才）である。

彼はみかん農家の摘果作業を手伝う中で日本の生産者がオレンジ自由化への不安を抱いていることを知った。彼は双方がいがみ合うのではなくお互い話し合う中で生きのびる道を模索したいと日米のかげ橋の役目を買って出た。

以来アメリカ側の出席者の依頼に飛び歩き、やっと実現に漕ぎつけたのである。いよいよ当日、ミニ国際会議並に日本側とアメリカ側のパネラー達が向き合って席につくと場内は物音一つしなくなった。同時通訳のため三百個の無線レシーバーが参加者に手渡された。会場後部に設置されたブースから通訳の早口言葉がレシーバーを通して耳に入ってくる。

まずコーディネーターが
一、地球レベルの経済における現状

二、クローバルな世界的経済における農業の位置

三、農業が自由化という局面の中で直面している問題

について具体的な問題を議論する土俵づくりにしたいとのべた。



松山と中島を結ぶ
高速旅客船

愛大教授を台めた三名のパネラーは、

「我が国は食糧自給率が下がり消費も停滞している。農業の特色をわきまえて自由化の道を探らねばならない」

「家族労働で成り立っている我が国の農業は、土地に対する愛着がある。経済優先で行くと土地が荒廃する」

「農産物は工業製品と同じでなく各国の生活・文化がある。アメリカの財政赤字のツケを廻すのは不合理」

と小気味よく詰め寄った。

次はアメリカ側の主張である。まずスライドでオレンジ園の紹介

があった。一二五ヘクタールを二人で経営するという大農園をトラクターが走り、規模の大きさは日本と比較にならない。しかし干害設備に莫大な費用がかかる事や、消毒薬の使用が消費者のニーズに合わなく見た目の悪いものしか作れない等、国境を越えて同じ生産者の悩みを明らかにした。

更に生産者も作るだけでなく消費者に対するマーケティング活動をすべきだと述べ「人々の嗜好は時間毎に変っている。花の嫌いな人に花を差し上げて喜ばないように、いいものを作るだけでは消費者につながらない。目に見える状態で第三者にわからず努力が必要である」

とさすがに自由の国だけあって弁論は流暢である。

午後は全体討議となり、会場の参加者にも発言権が与えられた。

「自由化は強者の弱い者いじめではないのか！」

生産者のなまの声が参加者のハートをゆさぶる。

次に立ち上った主婦は

「中島町には農業後継者が少ない。そして、若者は肉体労働を嫌う傾向にある。私の家に九才の男の子がいるが最近

「お母さんみかんづくりもうかるん？」

と聞かれ返答に困った。十年先、二十一世紀になった時、農業はいい職業だと胸を張っていえるような希望の持てる農家でありたい」と切実な願いを訴えた。

五時間程にわたる徹底討論は自由化に耐えて生き残るための道を尋ねたが、どうしても基本的に噛み合わない部分があった。

しかし、今回のオレンジシンポは日米両国が生声を出し合うことによって、相互理解の第一歩を踏み出したことは確かである。

活力は経済であり
潤いは文化である

といわれるが、どちらが欠けても町の活性化につながらない。

ちなみに中島町に初めてみかんが導入されたのは明治五年である。当時は十年後にしばらく収益のあがる作物として受け入れられなか



中島みかん・オレンジシンポ

った。

明治二十三年、町村制の実施に伴い初めて当時の村会議員が村の「産業振興」について話し合い、みかんの苗木を自分の畑に植えて広めていったと聞く。町誌を開き、その五名の村議の中に祖父の名を発見した私は頑固で有名だった人の顔を思い出した。

百年を経た今、子孫の私が、「産業振興課」に席を置いて同じ柑橘の問題を語っている訳である。

みかんの島として隆盛を極めた昭和元禄時代は過去のものとなったけれど、その過程には先人達の並々ならぬ苦勞が横たわっている

ことを忘れてはならない。

農業が流行を追ってはいけないのにファッション化してしまい、設備投資で頭を痛め、今又、自由化を迎えて生産者は目標を失いかけている。だがその事から目をそらしてはならないし、自分達の島を捨てる訳にもいかない。

幸いなことに我が町は適地適作として健在である。恵まれた地質と潮風を受けて糖度の高いみかんが生産される。

「自由化よ、来るなら来い」今こそ味のいいみかんを武器に島民魂を見せて欲しいところである。



トライアスロン

えひめ地域づくり研究会議「1990年次総会」のご案内

会員の皆さん、いかがお過ごしでしょうか？すでにお知らせしていますように、来たる2月27日（火）に「1990年次 総会」を開くこととなりました。お誘い合わせのうえ、是非ご出席いただきますようお願いいたします。

なお、総会資料から、「事業報告」「収支決算報告」「収支予算（案）」につきまして、次に紹介させていただきます。

当日は、日頃、なかなかお会い出来ない皆さんとともに、それぞれの悩みやお考えを話し合ったり、「研究会議のこれからの取り組み」などにつきまして意見交換できればと考えております。皆さまのお越しをお待ちしております。

◎ 「1990年次 総会」について

と き 1990年（平成2年）2月27日（火） 午前10：00～11：30

ところ 愛媛文教会館＜松山市祝谷町1-5-33 TEL 0899-45-8644＞

◎ 「1989年次 事業報告」について

1989年次 事業報告 （1988.11.1～1989.10.31）

1988. 11. 12	1989年次 総会	久万町 久万町民館
11. 12～13	『全国「木」のフォーラム』	久万町 上浮穴産業文化会館
12. 10	第一回運営委員会	まちづくり総合センター
12. 15	舞たうんVol.8発行	
1989. 2. 15	舞たうんVol.9発行	
2. 17	第二回運営委員会	まちづくり総合センター
3. 4	シンポジウム『景観からのまちづくり』	新居浜市 住友倶楽部
. 15	舞たうんVol.10発行	
4. 16	『女性フォーラム'89いわぎ』	岩城村 開発総合センター
5. 11	第三回運営委員会	内子町内子スポーツ・イン
5. 26	「基本計画シンポジウム」打ち合せ会	まちづくり総合センター
6. 15	舞たうんVol.11発行	
6. 17	「地域づくり塾」検討会	まちづくり総合センター
7. 8	「基本計画シンポジウム」打ち合せ会	久万町役場
7. 15	第四回運営委員会	まちづくり総合センター
7. 1～8. 20	アンケートの依頼と報告書作成	
8. 15	舞たうんVol.12発行	
8. 25	「基本計画シンポ」運営会議及び食談会	久万町 太宝寺
8. 26～27	ミニ・シンポ『基本計画を考える……』	久万町 上浮穴産業文化会館
9. 19	アンケート分析研究会	松山市 えひめ共済会館
10. 5	「'90えひめ地域づくり活動者集会」検討会	まちづくり総合センター
10. 15	舞たうんVol.13発行	

1989年次 収支決算報告書 (1988.11.1~1989.10.31)

【収入の部】

科 目	1989年次 予算額(A)	1989年次 決算額(B)	B-A	内 訳
繰越金	622,735 円	622,735 円	0	
会 費	981,000	621,000	△360,000	'88年次分 12人 36,000 円 '89年次分 195人 585,000円 * 未納'89- 136人 '88-16人
参加費	300,000	0	△300,000	
寄付金	10,000	0	△ 10,000	
雑収入	50,000	1,847	△ 48,153	預金利息
計	1,963,735	1,245,582	△ 718,153	

【支出の部】

科 目	1989年次 予算額(A)	1989年次 決算額(B)	B-A	内 訳
総会・シ ンポジウム費	280,000 円	245,855 円	△ 34,145	総会資料費164,055 弁当代 24,000 資料等送付 57,800
情報誌 発行費	171,000	0	△171,000	
事務局費	200,000	30,475	△169,525	運営委員会10,440(63.12.14) " 14,035(1. 5.11) 事務費 6,000 (消耗品)
研究会 事業費	600,000	62,943	△537,057	アンケート分析研究会39,253 景観シンポ 郵送料 13,970 基本計画シンポ 郵送料9, 20
予備費	712,735	0	△712,735	
計	1,963,735	339,273	△ 1,624,462	

(収入決算額) 1,245,582 円 - (支出決算額) 339,273 円 = (繰越金額) 906,309 円

1990年次 収支予算書 (案) (1989.11.1~1990.10.31)

【収入の部】

科 目	1989年次 予算額(A)	1990年次 予算額(B)	B-A	内 訳
繰越金	622,735 円	906,309 円	283,574	
会 費	981,000	1,449,000	468,000	1990年次分 331人×3,000 円 (既年 未納分) 152人×3,000 円
参加費	300,000	300,000	0	事業の参加費として 1,500 円×200 人
寄付金	10,000	0	△ 10,000	
雑収入	50,000	4,691	△ 45,309	
計	1,963,735	2,660,000	696,265	

【支出の部】

科 目	1989年次 予算額(A)	1990年次 予算額(B)	B-A	内 訳
総会費	280,000 円	350,000 円	70,000	総会資料印刷費200,000 会場費 30,000 (看板貼) 事務費 50,000 (切手貼) 食料費 50,000(500×100) 雑 費 20,000
情報誌 発行費	171,000	198,600	27,600	100 円×331 人×6 回
事務局費	200,000	200,000	0	運営委員会、事務諸経費
研究会・ 事業費	600,000	600,000	0	各種研究会、事業費
全県交流 集会費	0	300,000	300,000	
印刷費	0	800,000	800,000	報告集等の印刷費 800 円×1,000 部
予備費	712,735	211,400	△501,335	
計	1,963,735	2,660,000	696,265	

おまけ の ページ

私の知っている方が、あることを言われて、それがとても心に残っています。

「ある日、私は妻と朝、出かけにケンカをして、一日中ムシャクシャしていました。帰る時刻になったのですが、家に帰るのがおもしろくない。そこで、仕事の行き帰りにいつも通っている重信川の河川敷で車を止め、そこにいた何百羽もいるカモの群れをながめていました。

しばらく、じーっと見ていると、あることに気がつきました。それは、カモが2羽1組で泳いでいるということ。エサをとるときも3羽と離れません。2羽1組のカモが何百羽ものカモの群れをつくっていたのです。

『カモはあんなに仲よく助けあって生きているのに、私は……』
本当にカモに教えられた気がしました。私はさっそく家に帰り妻と仲なおりをしました。(省略)

夫婦の姿とはどういうものか、一例ではありますが教えられた気がします。ささいなことでもケンカをする時もあるでしょうけれど、そんな時、この方のたんと、それでいてしっかりと口調で話すこの言葉を、忘れないだろうと思います。

センターの人たちの
春の足音紹介
所長さん……シュシュと歩いてきて、フンといます。
山本さん……パタパタと歩きながら、ポンポンとお腹をたたきます。
豊田さん……ブーツと一点を見つめて、ペタペタペタ
幸地さん……ニコニコしながら、キュッ、キュッ。頭もキュッ、キュッ
井上さん……パタッパタッパタッ「ひなち、ひなち」と言ってます。
石川さん……パッコン、パッコン
ぬぎかけのカーディガンは、
まみchan……シュパ、シュパと歩き、いつもよく食べてます。
ひとchan……？いるのかいな
いのか。なんとも言えないへんな子です。

これからもよろしく！



私はお酒が好きです。特に日本酒とワインです。でも、だからといって決して飲んべーではありません。

『一杯の酒 人 酒をのむ
二杯の酒 酒 酒をのむ
三杯の酒 酒 人をのむ』
といいます。

お酒の好きな人、いやだけどのまなければいけない人等……いろいろありますが、くれぐれものみすぎには注意しましょう。

——梅の花が咲きました——

風雪にたえ、

なお美しく花弁を開き

その香りは甘く

彼方のうぐいすまでもひきよせる…

白梅の枝の清らかで、すがすがしい様子と紅梅の枝の華々しい姿にしばし心はうばわれる

過ぎゆく、ゆるやかな時の流れ…

今、ここにいられることに、感謝、

感謝

内容についてのご意見や活動内容についての記事など気楽にお寄せ下さい。

「舞・たうん」編集係

二人のM.S. (丹下・久保田)

まで。

〒七九〇 松山市道後一万一の二

郵便媛県まちづくり

総合センター

TEL

〇八九九(二五) 五五五七

FAX

〇八九九(二五) 六六八〇